

## 資料再考察「彼理登城將軍謁見之図」

資料課 上田 良知

### はじめに

当館が収蔵する資料群のひとつに「山口コレクション」がある。これは、旧帝国臓器製菓株式会社創業者であった山口八十八が収集した、幕末から明治維新期にかけての書簡・記録・建白書など、総点数 1017 点に及ぶコレクションである。昭和 53（1978）年に山口栄一氏から神奈川県に寄贈され、現在当館で所蔵している。

山口コレクションの内容については、昭和 54 年に当時の文化資料館が『文化資料館目録 古文書の部 第三集（山口コレクション）』として目録化しており、現在当館の検索データベースにおいても、この目録の情報がそのまま使われている。

この山口コレクションの中に、「718 春木南溟(画) <sup>ハリス</sup>波理 登城將軍謁見之図」（以下「謁見之図」）（図 1-1～図 1-6）という資料がある。これは、安政 4（1857）年にアメリカ総領事ハリスが、江戸幕府第 13 代將軍 徳川家定に謁見した際の様子を描いたものとされている。当館の「公文書館だより 第 21 号」でも、この記述に則り、「彼理登城將軍謁見之図」<sup>(1)</sup>として紹介している。

しかし、平成 21（2009）年に筆者が資料の掲載許可に関する事務を担当することになり、たまたまこの資料の掲載許可申請を扱った際、非常な違和感を覚えた。それは、ハリスとされる人物が軍服と思しき服を着用していたからだ。また、將軍とされる人物が、

図 1-1 彼理登城將軍謁見之図



図 1 - 2



図 1 - 3



図1-4



図1-5



## 資料再考察「彼理登城將軍謁見之図」

普通では考えられない位置に着座していることも、この資料に対する疑問を増大させた。この資料は、ハリスが将軍に謁見している場面を描いたものではないのではないかと。

本稿では、文献資料からハリスが謁見した場面を読み取り、描かれている様子との整合性を検証し、この資料が「ハリス登城將軍謁見の図」であるか否かを検証していく。

### 1 ハリス謁見の描写

最初に、最も検証しなければならない人物、ハリス(図2)について見ていきたい。

ハリス(Townsend Harris)は、1804年アメリカ ニューヨーク州に生まれる。1846年にニューヨーク市教育委員会委員長となり、翌年ニューヨーク市立大学の前身となるフリー・アカデミーを実現させる。その年、一転して太平洋・東アジア貿易の開拓を開始し、それにより外交官への意識が芽生える。そして1854年、大統領に懇請し在日初代総領事となり、安政3(1856)年に来日する。翌安政4年、江戸城で13代将軍 家定に謁見してアメリカ大統領の親書を上呈、同5年に日米修好通商条約を調印する。その功績により公使に昇格する。文久2(1862)年に日本を去り、帰国後は公職を辞し、1878年にニューヨーク市で死去している。<sup>(3)</sup>

ハリスが登城した際の様子は、次のように記されている。

#### 資料1<sup>(4)</sup>

一、亜墨利加使節登 城。御目見就被 仰付。溜詰。御譜代大名。同嫡子。高家。同嫡子。御奏者番。同嫡子。菊之間縁頼詰。布衣以上之御役人。法印法眼之医師登 城。下田奉行井上信濃守使節召連登 城。通弁官ハ大手下馬所ニ而下駕。使節ハ下乗橋外ニ而下駕。役々付添。下田奉行案内す。玄関階上江大目付一人。御目付一人出迎。一揖之後令案内。使節ハ殿上間御下段襖之際北向ニ罷在。通弁官ハ御同所西之方御

図2 ハリス<sup>(2)</sup>



張附際ニ罷在。但し何れ茂椅子令着之。下田奉行差添罷在。書簡ハ台ニ載。使節之脇ニ置之。御用掛之面々一同出席。及挨拶候事。出御前大目付案内ニ而。使節殿上間より。大広間御車寄之際仮控所江相越。書簡ハ通弁官持之相従。但し此处ニ而茂椅子相用。下田奉行差添罷在。大目付ハ板縁ニ罷在。但し此時 御目見習礼を致す。大広間江 出御。①御立烏帽子。御小直衣被為 召。御先立久世大和守。御太刀。御刀御小姓持之。②御上段江七重之御厚畳。錦を以包之。四方之角江紅之大総附飾。御刀掛置之。御曲録江着御。御上段。御中段。御下段。并御縁通り。③御簾卷揚之。御後座ニ御側衆。并御太刀之役。奥方之面々伺候。御下段西之方より一畳目通り。松平讃岐守。井伊掃部頭。松平越中守。松平民部大輔。酒井雅楽頭順ニ着座。御同所東之方上より一畳目。年寄共。本田美濃守。御中段西之御縁類江若年寄。御側衆着座。御下段西之御縁類江畳を敷。高家。雁之間詰之四品以上之輩列座。二之間北之方二本目御柱辺より。御襖障子際東之方。四品以上之御譜代大名。雁之間詰。御奏者番。菊之間縁類詰。右嫡子ども。布衣以上之御役人。法印法眼之医師列席。 出御之節ニ至り。大目付より下田奉行江会釈之時。披露之御奏者番。御下段下より二畳目東之方江罷出。下田奉行使節召連罷出。御下段御敷居際板縁ニ着座。御下段下より二畳目江罷出。通弁官ハ書簡を持板縁ニ罷出。此時亜墨利加大統領より之口上申上之。和解左之通。

(中略)

上意。 遠境之处。以使節書簡差越。令満足候。猶幾久敷可申通。此段大統領江宜可申述。其時通弁官書簡使節江渡之。板縁江退。備中守座を立。書簡請取之復座。御会釈有之。使節拝而退去。下田奉行。通弁官茂一同二之間板縁江退。通弁官ハ御目付令案内。御車寄仮控所江退去。間もなく若年寄一人。西之御縁通り御下段へ罷出。備中守より書簡請取之。西之御縁江退座。奥御右筆組頭江渡之。重而御奏者番出座。大目付江会釈有之。下田奉行使節召連。最前罷出候節之通。使節御下段下より二畳目江罷出。トウンセント、ハルリスと披露。使節自分のお礼謹拝。御誕有之。年寄ども御取合申上退去。下田奉行差添。大目付令案内。御車寄仮控所江相越。終而御間之御襖障子。年寄ども開之 立御。御譜代衆。其外一同 御目見。相済

## 資料再考察「彼理登城將軍謁見之図」

而 入御。 入御以後。大目付。御目付令案内。下田奉行差添。使節。通弁官  
殿上間江退去。

(後略)

この中で、使節はハリス、通弁官はヒュースケンを指す。

これによると、江戸城へ登城したのは、ハリスとヒュースケンの2名であったことがわかる。一方、「謁見之図」に描かれたアメリカ側の人物は最大で16名居り(図1-1)、明らかに異なっている。

また、ハリスが登城した際の服装は、「国務省の規程による、金で縫い取りした上衣。幅のひろい金線が縦に通っている青色のズボン。金色の房のついた上反り帽、真珠を柄にはめた飾剣」<sup>⑤</sup>といったものであった。

対して「謁見之図」に描かれたハリスとされる人物(図3)の服装は、黒を基調とし、襟・肩・袖に黄もしくは金があしらわれている。明らかにハリスが着ていた服装とは異なっている。加えて、図3の人物の服装は、他の人物が着用しているものと同一であることから、制服であると考えるのが妥当である。

そして、將軍 家定の服装であるが、資料1傍線①から、立烏帽子に小直衣を着用して

図3 ハリスとされる人物



図4 家定とされる人物



いることがわかる。しかし「謁見之図」に描かれた家定とされる人物（図4）は、直衣はまとっているが、かぶっているのは立烏帽子ではなく、普通の烏帽子である。

人数・服装を見ただけで、これだけの相違点が見られる。

次に家定の着座位置であるが、資料1 傍線②から、大広間上段に錦で包み四隅を紅の大綵で飾った厚い畳を七枚重ねに置き、刀掛けに刀を置き、曲録（＝椅子）に座っていた様子がわかる。また資料1 傍線③には、簾を巻き上げると、家定の後ろに側衆・太刀持ち・奥向きの用を務める人たちが窺えるとあり、ハリスと家定の間には簾があること、将軍の後ろに控えている人物がいることがわかる。しかし図1－2では、将軍は椅子に座っておらず、簾もなく、将軍の横に座っている人物が描かれており、明らかな相違が見られる。

こうしたことから、この資料は、ハリスが将軍に謁見した様子を描いたものであるとは考えられない。加えて、ハリスの漢字での表記は、「波児里士（ハルリス）」<sup>⑥</sup>であり、「彼理」はハリスを指してはいないのである。

## 2 ペリー来航時の様子

「彼理」とは誰を指すのか。そのヒントは、同じ山口コレクションにある。「717 春木南溟(画) 金河奇勝(横浜開港画卷)」は、嘉永7（1854）年にアメリカ東インド艦隊が二度目の来航をしたときの様子を描いた資料である。この資料の箱書きに「嘉永甲寅仲春米国水師提督彼理氏横浜上陸図」と記されている。「米国水師提督」とはアメリカ海軍提督のことであるから、「彼理」とはペリーを指していることになる。

ペリーを「彼理」と表記する資料や文献は、『続通信全覧』をはじめ枚挙に暇がない。こうしたことから、「彼理」とはペリーを指すことに疑いの余地はない。そもそも、「彼理」がペリーの漢字表記であるのは、広く知られていることだろう。

では「彼理登城将軍謁見之図」は、ペリーが将軍に謁見したときの様子を描いたものかという、そうではない。ペリーが将軍に謁見した事実はないからである。では、この「謁見之図」は、どのような場面を描いたものであるか。それには、ペリーについて見ていく必要がある。

ペリー（Matthew Calbraith Perry）（図5）は、1794年アメリカ ロードアイランド州

## 資料再考察「彼理登城將軍謁見之図」

に生まれる。1809年に父や兄同様海軍に入隊、1837年にアメリカ初の蒸気軍艦を建造し初代艦長となる。1852年東インド艦隊司令長官兼遣日特使として出向、大西洋回りで嘉永6（1853）年に日本に来航、翌嘉永7年に再来航し、日米和親条約を結ぶ。1855年に帰国した後、アメリカ政府から『日本遠征記』の編纂監修を委嘱され、1857年に完成出版する。そして、1858年ニューヨーク市にて死去した。(8)

ペリーが日本に上陸したのは、嘉永6年来航時の久里浜、嘉永7年来航時の横浜である。久里浜での様子は次のように記されている。

図5 ペリー(7)



## 資料2(9)

嘉永六年六月九日

書翰受取ニ付曉六時一同出宅、於陣中受取候作法故、陣押ニて出張也、先陣下曾根金三郎騎馬、ケハール組同心五十人、太鼓役同心大久保釦之助、応接掛・兵糧掛・手明与力之分附属、伊豆守先手、旗・鉄砲・長柄・大馬印・持鎗・持筒・出張附同心与力・小馬印・旗本<sup>員役・</sup>太鼓役・医師・用人・給人、引続石見守大馬印・小馬印・旗本惣同勢、次ニ<sup>(茂抜けカ)</sup>辻右衛門騎馬ニ而打立、一同陣羽織・陣笠・武器用之、久里浜ニ者筋御幕ニて海面并島通見切打回し、①仮ニ陣小屋取繕ひ、紫幕・金屏風・畳敷・毛氈敷、上段下段之形ニいたし、②使節・将官・副将・士官頭<sup>江者</sup>腰掛出し、伊豆守・石見守・茂右衛門床机、其次ニ与力着座、奉行近習之者勤番、右之方幕張外、下曾根金三郎床机ニ掛り、ケハール組四十八人・太鼓役一人、与力差図役合原操蔵・樋田多二郎左右ニ相立差配之、少し退て百五十目野戦筒二挺、打方与力四人・同心六人間賦り、陣所左之方ハ奉行手人数、鉄砲二十挺、長柄二十筋固之、御固方ニ者井伊掃部頭人数二千百六十八人、松平誠丸人数五百人、陸地住吉明神前より渡湯川口一面ニ陣取、海上千駄崎より内手松平下総守船手五十艘、鶴崎より内手松平肥後守船手百五十艘、武器嚴重ニ相備、場所



宜頃蒸気船二艘追々繰上ケ、鶴崎・千駄崎江乗参り、応接掛り栄左衛門・三郎助・良次・桐太郎、押送船二艘ニて使節案内として異船江いたり、無程異人上陸、使節一人・将官一人・副将一人・士官頭一人・歩兵ニいたるまで凡三百人余上陸、海面江備相立、使節はじめ士官之分三十人計幕張内江呼入、書翰受取候、尤目礼計ニて一言も不相交、直ニ退散、本船ニ立戻り、応接掛り一同為送相越、右相済、一同兵糧相用ひ、陣払い、田中町通帰陣

「癸丑雑書」

資料2 傍線①にある通り、久里浜では仮の陣小屋を建て、紫幕・金屏風を備え、畳敷と毛氈敷で上段・下段の形を拵えたようで、「謁見の図」にあるような建物では会談していない。また資料2 傍線②から、アメリカ側が腰掛け（長椅子のようなものか）、日本側は床几（折りたたみの簡易椅子）に座っていることがわかる。このことから、久里浜での様子を描いたものではないといえる。

次に横浜での会談の様子を見ていこう。

### 資料3<sup>(10)</sup>

安政元甲寅年二月

十日大学頭・対馬守・美作守・民部少輔・満太郎其外役々之者皆早朝より①横浜応接之所へ相詰申候自注此時応接所左右後三方ハ小笠原大膳大夫・真田信濃守人数相固幕張三面相囲候、海手ハ松平相模守人数番船数百艘相固め申候、九ツ時使節ヘルリ上陸仕候但ハツテイラ船二十八艘にて列を整へ推渡り来る船ハ皆黒く御座候処、使節之船計者白く旗も別なるを建申候、惣人数六百人計上陸ニ而音楽并調練等仕候、②ヘルリ始三十余人応接所ニ入列座致し、大学頭・対馬守・美作守・民部少輔・満太郎出會挨拶ニ及申候

(中略)

「某漫録」

横浜では、資料3 傍線①にある応接所で会談が行われている。この建物は、会談が横浜村と決定した後、浦賀から移築され2日で建てられたものである<sup>(11)</sup>。また資料3 傍線②か

## 資料再考察「彼理登城將軍謁見之図」

ら、アメリカ側は 30 人ほどが応接所に入っていることがわかる。これは図 1-1 に相応すると思われる。

応接所で実際に会談に臨んだ人数は、アメリカ側はペリー、参謀長アダムス、通訳のウィリアムズとポートマン、秘書のペリー（息子）の 5 名<sup>(12)</sup>である。これは図 1-2 と合致する。一方の日本側は、幕府の応接掛である儒者 林<sup>(復斎)</sup>大学頭、町奉行 井戸<sup>(寛弘)</sup>対馬守、浦賀奉行 伊沢<sup>(政義)</sup>美作守、目付 鶴殿<sup>(長鋭)</sup>民部少輔、オランダ通詞 森山栄之助、儒者（認役）松崎満太郎の 6 名<sup>(13)</sup>であり、図 1-2 と異なるが、ここには下役の者も描かれていると考えられるので、「謁見之図」はペリーが林大学頭と会談した様子を描いていると考えて間違いないだろう。

またペリーの服装であるが、次のように記されている。

### 資料 4<sup>(14)</sup>

(前略)

身の丈六尺五寸、肉太り、面色桜色、鼻筋高く、眼光尖く金の色あり、毛髪薄色の金色ニ而至て短く鬚はなし、惣身の衣装烏羽玉羅紗、袖ハ筒袖、帯の下迄伴てんの如くニして、二の足より上の四寸計の処ニ而<sup>スソ</sup>裳<sup>縦</sup>を留、同色の股引 従ニ金の割筋を入、半てんの裳と筒袖の口の処飾り筋金ニ而入ル、右の腰ニ小筒の鉄砲を、左の腰ニ龍頭の剣を佩ヒ真紅の紐を長く下げ、其端の処右の腰の小筒ニ而<sup>タイコウ</sup>留る、帯鉤ハ金銀ナリ、肩ニ牡丹の金物房下る、胸元ニ草榻の如き金細工の物を当て、胸の下より帯鉤の処迄二通りニ牡丹の貫留有、数合ニ二十粒、一ツ一ツニ鷲の紋を附、舟より立出、右の手ニ笠ぬぎ持たる様体ハ、実ニ大国の使節ト見えぬ

(後略)

図 5 でペリーが着用しているのは、大型の肩章がつけられた海軍の礼服（燕尾服）であると思われる。

資料 4 に記された姿も、全身が烏羽色の玉羅紗とある通り黒い服（厳密にはネイビーブルーか）とされている。上着は袖筒で、半纏のように帯（＝ベルト）の下までである。上着

と同じ色の股引（＝ズボン）には縦に金の割筋が入り、裳（襟か？）と袖口に金筋の飾りがある。肩には牡丹の金物房（＝肩章）があり、胸元は草榻のような金細工（徽章か？）をつけ、胸から帯鉤（＝ベルト留）まで二列のボタン、計 20 個があり、そのひとつひとつに鷲の紋様がついている。このように記されている。おおよそ図5と同じような装いであったろう。

図1-5を見るとよくわかるが、「謁見之図」に描かれたアメリカの人々が着用しているのも、大型の肩章がついた燕尾服である。つまり、ここに描かれているアメリカの人たちは、皆海軍の人間であるといえる。

こうしたことから、「謁見之図」はペリーが林大学頭と横浜の応接所で会談した様子を描いた資料であると断定できる。

### 3 「彼理登城將軍謁見之図」に残されたメモ

では、なぜこの資料が、ハリスが將軍と謁見している場面を描いたものであると伝えられてきたのであろうか。その原因となるメモが、同資料と共に保管されている。

#### 資料5

##### 参考

嘉永六年癸丑ノ年（実際には1853年）（西暦 千八百五十二年）米国水師提督ペルリノ浦賀ニ来航ノ後、  
 翌安政元年正月（実際には1854年）（西暦一、八五三）ペルリハ軍艦七隻ヲ率ヒテ再ビ来航シ同三月、日本間ニ和親条約十二ヶ条ヲ締結シ、下田、函館ノ二港ヲ開港スル事トナレリ  
 此ノ条約ニ基キ安政三年（実際には1853年）（一、八五一）米国ハ、ハリスヲ全權使節トシテ下田港ニ遣セリ、而シテハリスハ將軍ニ謁シ国書ヲ提シ通商貿易ノ約款ヲ議セント請求シ、此ノ結果、翌安政四年江戸ニ入り千代田城ニ登城シ、將軍ニ謁シ開港通商ノ利害ヲ説キ、支那ノ敗亡、印度ノ亡滅ヲ説キ、幕府ヲ茫然自失セシメ、其説ニ伏従セシメタリ（本図ハ其謁見ノ状ヲ実写セシモノ）

山口八十八氏は、入手に際し「維新史料調査の専門学者、文部省維新史料編纂官藤井甚

## 資料再考察「彼理登城將軍謁見之図」

太郎氏などに託して一点一点その真偽と内容を吟味し<sup>(15)</sup>ている。このメモも、そうした当時の有識者に依頼して鑑定してもらった際に書かれた、鑑定結果であると思われる。このメモが残されていたため、この資料が現在まで「ハリス登城將軍謁見の図」として伝えられることとなったのである。

## おわりに

以上見てきたように、この資料は、アメリカ総領事ハリスが江戸幕府 13 代将軍 徳川家定に謁見した場面を描いたものではなく、アメリカ海軍提督ペリーが江戸幕府の応接掛 林大学頭と会談している場面を描いたものであるといえる。当館所蔵資料の中には、「謁見の図」同様、調査時に認識を誤ったまま公開している資料が多数存在している。今後も、そうした資料の内容訂正に努めていきたい。

## 【注】

- (1) 資料箱書きには「波理」ではなく「彼理」とある。
- (2) Hon. Townsend Harris  
(アメリカ議会図書館 LC-DIG-cwpbh-01611 <https://www.loc.gov/item/2017896747/>)
- (3) 『国史大辞典 第 11 巻』(吉川弘文館 平成 2 年)
- (4) 『続徳川実紀 第三篇』(『新訂増補国史大系 第五十巻』 吉川弘文館 昭和 41 年)
- (5) 坂田精一『ハリス』(吉川弘文館 昭和 36 年)
- (6) 『続通信全覧 類輯之部六 修好門』(外務省外交史料館 蔵)
- (7) [Commodore Matthew C. Perry, three-quarter length portrait, standing, facing slightly left with left hand resting on sword]  
(アメリカ議会図書館 LC-B8171-1317 <https://www.loc.gov/item/2001695235/>)
- (8) 『国史大辞典 第 12 巻』(吉川弘文館 平成 3 年)
- (9) 『通航一覽続輯 第四巻』(清文堂出版 昭和 47 年)
- (10) 同前
- (11) 西川武臣『亜墨利賀船渡来日記』(神奈川新聞社 平成 20 年)

(12) 同前

(13) 同前

(14) 石野 瑛 編著『武相叢書第一編 亜墨理賀渡来日記』（武相考古会 昭和4年）

（国立国会図書館 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1226551>）

(15) 『文化資料館資料目録 古文書の部 第三集（山口コレクション）』（神奈川県立文化資料館 昭和54年）